

加賀文庫本『甲斐名勝志』と甲府書肆村田屋孝太郎

稲岡 勝

はじめに——目録と書誌

『甲斐名勝志』の諸版について調査をしたこと（『都留文科大學研究紀要』第六九集 二〇〇九年三月）がある。この甲州の地誌は寛延二（一七四九）年甲斐国山梨郡田中村に生まれた国学者萩原元克の著作で、「甲斐の地理に就きて、県人最初の著也。著者は本書を作るに際し、県下を隈なく踏査せられたるものにして（口絵本居宣長の長歌参照）甲斐国内の勝概を叙し、神社・仏閣等に関する其の由来を記せり」（『甲斐志料集成』第三卷解題）。半紙本三分冊九十六丁の本文に、天明二年三月加賀美光章序・天明三年九月堀内憲時跋のついた所謂地方版である。

序跋の二人は萩原元克と縁故の深い甲州人で、加賀美は学問の師、堀内は和歌に秀でた年上の親友である。

この書は「刊・印・修」の弁別を眼目とする板本書誌学から見ると、諸本に異版の關係はない同版本だから印刷の先後を追究すればよく、比較的単純な部類に属するように見える。しかしながら見返や奥附などに明確な刊行（印刷）年記がないので、その本が実際に刷られた時点を確認するのはそう簡単なことではない。普通は序跋の年記を以てそれに代えることが多いが、慎重を期せば刊年不明とする方が無難であろう。何れにせよ目録を採る人を誤らせやすい難物ともいえるし、現実にもそうなっていることを次に見てみよう。

早くからこの書に諸版のあることは認識されてはい

た。例えば昭和八年甲府で刊行された『甲斐志料集成』『甲斐叢書』には、各々底本に使用した版の明示がある。この二つの大部な叢書は郷土研究に不可欠だが入手の困難な記録・文書・日記などを翻刻し、一般の便宜を図った今日でも価値のある資料集である。近年の例では『山梨県史通史編四（近世二）』（二〇〇七年）に曖昧な記述（六二八頁）が見当たるが、この地誌は地元人にしても正確な諸版の識別は難しいようである。

また『国書総目録』における諸機関の所蔵情報では、「天明三版、天明六版、天明七版、天明八版、刊年不明」に分けて示しているが、果して正確に弁別されていると言えるのだろうか。かつて前記の拙稿において所蔵情報を可能な限り実地にあたって検証してみたが、なんとその半数以上が誤りと判り愕然としたことがある。「天明七版（京大、高木）、天明八版（国学院）」はともに存在しないし、「刊年不明（国会、内閣、刈谷、神宮、鈴鹿、丸山）」版の印刷年は丸山を除きすべて特定できた。『国書総目録』が書誌学的に厳密性を欠くことはよく言われることではあるが、改めて実感した次第である。『甲斐名勝志』についても長沢規矩也の警告「一般の研究者がこの

目録のみ頼って伝本の同異を判定しては非常に危険である」（『古文獻の捜し方扱い方』）はピタリと当てはまる。

問題はなぜこのような錯誤が長い間気づかれずに来たのかと云うことである。先ず一般論を言えば、目録と書誌とは本来別物なのに依然として混同している関係者の書誌学的無知に由来する。『甲斐名勝志』の伝本の内、ある機関が所蔵する特定の一点（a copy）をどんなに詳細に記述しても、それはあくまでも目録であつて書誌にはならない。書誌とは伝本を出来るだけ多数数調べて、その結果その書物の「物」として認識される「あるべき姿」（ideal copy）を記録するものなのである。具体的には各機関や個人が所蔵する伝本を一点一点比較観察する作業を進め、その地道な積み重ねの結果としてある特定書物の全体像（書誌）が完成する。ひとたび全容が見渡せるようになれば、以後は新種のものが出現してもその書誌に照合すればよいわけで、個別の位置情報（橋口侯之介『和本入門』平凡社 二〇〇五年、一〇〇頁）は自ずと容易に確定できるであろう。それが書誌編成の効用であり目的である。

本稿では『甲斐名勝志』諸版の調査を試みた際の経験

に基づき、この書の諸版識別の要領、つまり板本の着目すべき構成要素について勘所を呈示してみた。また加賀文庫本を対象にして、この書が存在した時代の確かな証跡を読み解きその意味を考察する。それと同時にこの書を製本発売した甲府の書肆村田屋孝太郎について、交流のあった人物や刊行した書物・絵図に即してその出版活動を跡付けてみる。

一、『甲斐名勝志』諸版の識別とその要領

『甲斐名勝志』諸版の識別に誤りが多いのは、多くの機関が指標となる板本の存在に全く気付かずに行ったことが一番大きい。唯一の例外は内閣文庫であるが、ここには版種を異にする六点の所蔵があつてその場で比較検討が可能であつた。この有利な条件があるからこそ位置情報におよその見通しがつき、目録の記述も正確を期すことが出来たのである。

では重要な標準となる板本とは何を指すのか。それが今回取り上げる甲府書肆村田屋孝太郎が天保十五年に復刊した『甲斐名勝志』なのである。これに比べると

天明期の版は総じて単純素朴で、目録記述上も余り間違う要素はない筈である。天明三年跋刊の家刻版は今日流に言えば萩原元克の自費出版にあたるが、その出版実務は恐らく江戸の須原屋伊八（須伊）が請負つたと思われる。さらに須伊はこの書が商売になると見たのか書物仲間から販売の許可（『割印帳』天明六年九月二十四日）を得て商品として発売した。その際地誌好きとして有名な大名（朽木昌綱）の序文を付加したり、袋を新たに作つて人目を引く工夫をした。こののちは文化二年に著者萩原元克が没したこともあつて、この板木は長く書庫に眠ることになる。

天保十五年村田屋孝太郎（村孝）はこの書を文字通りのお蔵入りから約六十年振りに復活させた。折から甲州地方では、文化年間中に大部な『甲斐国志』が編纂されたりして地誌に世の関心が高まっていた。甲府の書肆はそれを敏感に受け止め商機と見て、相当に力を入れて製本し売り出したようだ。そのため村孝本には須伊本とは異なる板本の構成要素が多々あり、実はそれが識別の重要な指標になるのである。以下その差異に触れつつ記述してみよう。

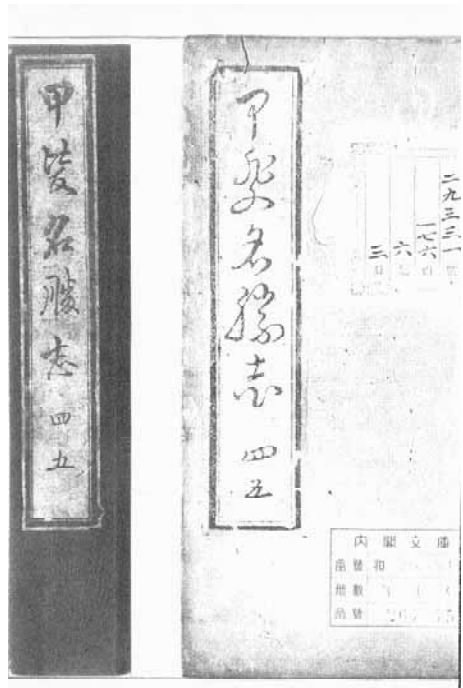


図1. 題簽(右)天明期、(左)天保以降のもの(内閣文庫蔵、以下内閣と略記)

(一) 題簽：須伊本では紙片の幅がやや広く、各冊ごとに書名の字体を楷・行・草と変えて凝っている。村孝本はそれに比べ紙片の幅が狭く、字体も各冊共に同じで平凡なものである。題簽は天明期と天保以降のもの(図1)とでは一目でわかるほど明白な違いがあり、これは素人にでも出来る簡便な諸版識別の第一歩となる。これに照らして『国書総目録』の所蔵情報を見ると、

「天明三版 宮書・学習院・都立加賀・都立東

京・(九大は未調査)および「天明六版 宮書・京大・筑波・東大・東大史料・日大・尊経」はすべて村孝本以降の版であって、刊(印刷)年表示は遺憾ながら誤認と言わざるを得ない。刊年の明示がない場合序跋の年記を以てそれに代えるのは書誌学の原則ではあるが、機械的に原則を守ると後印本には適用できないことを忘れてはちだ。その本が実際に刷られた時点を確認するのは案外難しいのである。

(二) 見返：須伊本は家刻版も含め白紙で見返はない。ただし「甲斐名勝志／東武 青藜閣」とする袋を作ったよう、宣長記念館本(萩原元克が師事した本居宣長に献呈したもの)のみに遺存する。村孝本ではあらたに見返「萩原元克先生編輯／甲斐名勝志・全部五巻／製本所 永栄堂」(図2右)を附けた。製本所の箇所はそのうち求版などにより、擁萬堂、温故堂(内藤伝右衛門)に変わる。また堂号の下に朱印の有無もあつて、ない方は後印である。

(三) 題字：甲府勤番支配浅野梅堂の筆跡をそのまま



図2. 永栄堂版の見返(右)と、題字(左)(都立図書館加賀文庫蔵、以下加賀と略記)

板刻(図2左)したものの。村孝の求めに応じて『西都賦』から四字を摘録したと後語にある。この事実を最初に指摘したのは森銑三(『落葉籠』五十一)である。題字は村孝本の永栄堂版にしかない筈なので識別の有力な手掛かりになる。

(四) 棒状目印：板木には文章の切れ目や、巻と巻の間などに職人への目安として故意に淺い残しを作ることもある。摺るときには墨さえ付けなければ紙面に印刷されることはない。村孝本の永栄堂版には故意か不注意かは不明だが、二か所(凡例末尾、第三巻末尾)に棒状目印を印刷したものの(図3)がある。永栄堂版は数多く遺っている。棒状目印の有無は印刷の先後を判断する際に大きな決め手となる。これも無い方が後印である。

(五) 追加跋文：最も重要な情報でありながら、一丁の追加された跋文(図4)は目立たなくて長いこと見逃されてきた。その前半は「萩原元克先生著書」で、既刻未刻の著作七点を掲出。後半

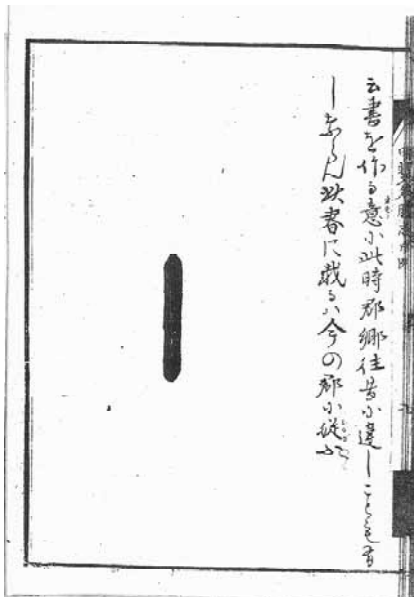


図3. 凡例末尾の棒状目印（加賀）

には孫にあたる萩原卓の識語があり、復刊に至る事情を述べている。「今茲甲辰秋書肆永栄堂主人来請予蔵板欲公於同好者焉……天保甲辰歳残菊節 萩原卓謹識」。識語の年記こそが永栄堂版を「天保十五年印」とした根拠である。内閣文庫の目録のみが正しく記述している。

(六) 奥附：天明期のものは「甲斐国山梨郡田中／萩原元克蔵版 印／東都劄刷・西冲考又は東叡山池之端仲町・東都書林須原屋伊八」（図5）と比較的単純である。村田屋孝太郎版以降は、「萩

<p>田舎番志 跋</p> <p>以蘇不蘇多... 祖父也 園好玉子 殿有風... 考嘗撰... 孫志勉上梓 文化... 且歳没後... 板子... 之... 之... 之... 書肆永栄堂主人来請予蔵板欲公於同好者 爲文物... 於... 於... 於... 於... 於... 朕川... 予... 予... 予... 予... 予... 来... 予... 予... 予... 予... 予... 歸... 予... 予... 予... 予... 予... 残菊節</p> <p>萩原卓謹識</p>	<p>萩原元克先生著書</p> <p>甲斐名勝志 家刻 三冊</p> <p>正謀秋の物語 大坂松村式刻 一冊</p> <p>道隆校札 江戸北澤民刻 三冊</p> <p>道乃論 未刻 一冊</p> <p>以蘇乃屋集 古訓三近閣二 五冊</p> <p>静富詩文集 三冊</p> <p>李杏園詩文集 曾祖元翼著 五冊</p>
--	---

図4. 追加跋文（著書と識語）（加賀）

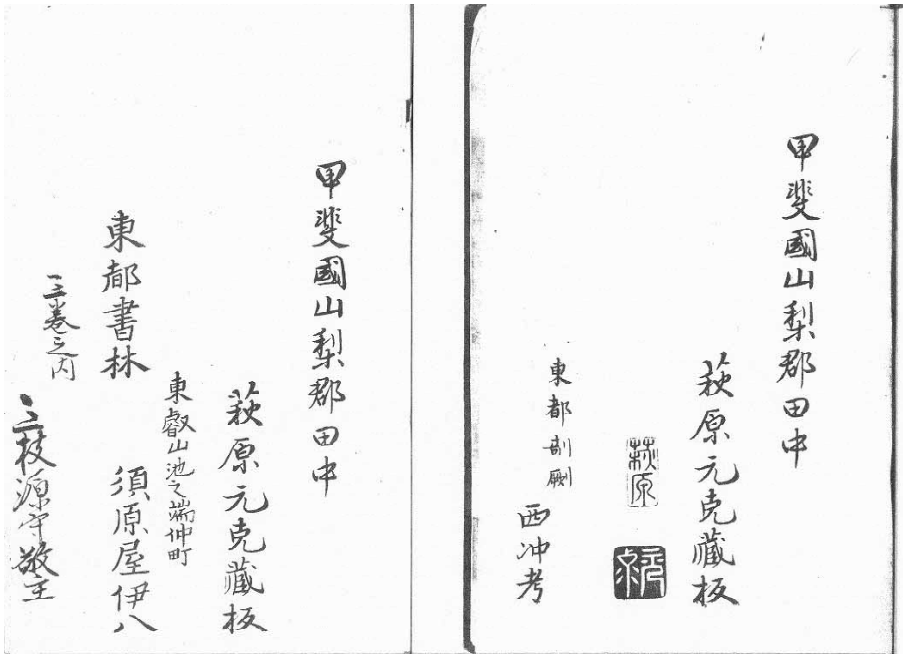


図5. 天明期の奥附（内閣）

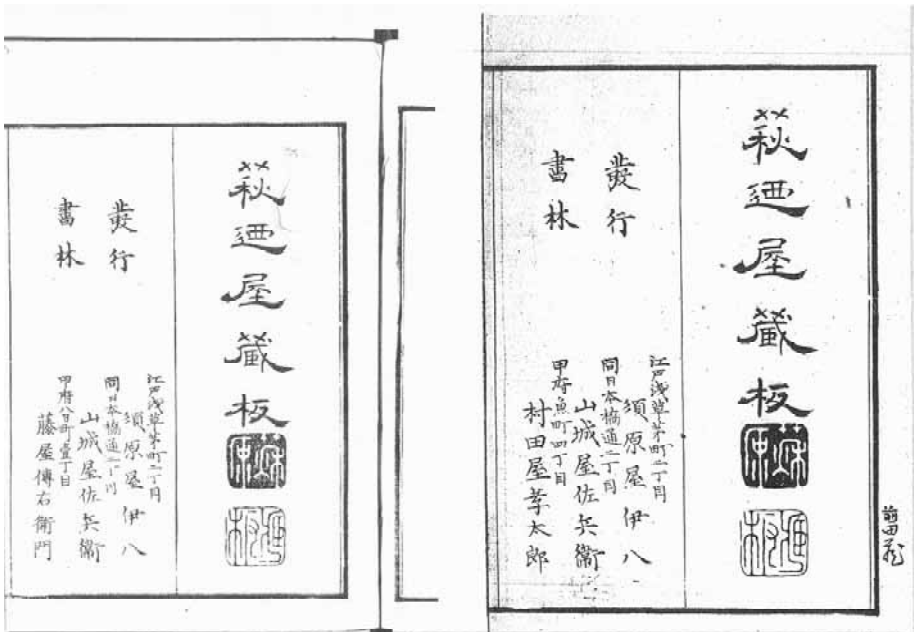


図6. 天保以降の奥附：右・村田屋本（加賀）、左・藤伝求版本（内閣）

廻屋蔵板 印／発行書林 江戸浅草茅町二丁目
 ・須原屋伊八／ 同日本橋通二丁目・山城屋佐
 兵衛／ 甲府魚町四丁目・村田屋孝太郎」（図
 6右）の形が基本となる。この奥附の意味する
 ことは、須伊が天明期に得た蔵版の支配権はそ
 の後も有効で、村孝は復刊する際に須伊に示談
 をとげて相版とした証拠と見られる。その後村
 孝の権利は内藤伝右衛門に買取（求版）される。
 その奥附では村孝の部分を削って埋木し藤屋伝
 右衛門の名が刻まれる（図6左）。さらに藤伝
 は須伊の権利も買取して丸株としたので、奥附
 は「萩廻屋蔵版 印／出版人 内藤伝右衛門／
 売捌 同支店」に替え、合わせて題簽も須伊の
 ものを使用している（日大武笠、尊経閣、大東
 急本など）。藤伝の東京支店の設置は『朝野新
 聞』広告によると明治十年十月初めのことだか
 ら、それ以降の出版物とみられる。

以上板本の構成要素に従い、『甲斐名勝志』諸版識別
 の要領を示してみた。なお表紙については色・模様、原

表紙・後補の問題など話が細かくなるので今回は省略し
 た。私見では時代と出版者によって次のように三つに大
 別、さらに各々の中を違いによって区分し、都合六種類
 に分けるのが正解かと思う。参考のため各版に該当する
 『国書総目録』の所蔵情報も示した。

天明期・須原屋伊八版

①家刻版（天明三年跋刊） 加賀美序・堀内
 跋、萩原元克蔵板／東都割腕西冲考

○『国書総目録』

内閣（二六七―七六）、慶大、東北狩野、鶴
 舞、無窮神習（以上東京都割腕西冲考）

内閣（二六七―七五）、京大大惣、東大（二三

〇―八七五）（以上須原屋伊八）

②須原屋伊八版（天明六年印） 序跋同前・

龍橋朽木昌綱天明六年序、萩原元克蔵板／東
 都書林須原屋伊八、*『割印帳』天明六年九

月二十四日に記載あり

○『国書総目録』

内閣（一七三―一一〇）、岩瀬、刈谷、大和
 文華（旧鈴鹿）

天保嘉永期・村田屋孝太郎版

③永栄堂版（天保十五年印） 序跋同前・龍

橋朽木昌綱序同前、見返（永栄堂）、題字、天保十五年識語、萩廼屋藏板／村田屋孝太郎〔等〕

○『国書総目録』

内閣（二七三―一一一）、宮書（一六四―九一

四）、京大農（枝番五）、都立図加賀・東京、国学院

宮書（一六四―九三二）、国学院（芳賀）、神宮

④擁萬堂版（嘉永年間印） 序跋同前・龍橋

朽木昌綱序同前、見返（擁萬堂）、萩廼屋藏板／村田屋孝太郎〔等〕 *ただし題字・識語は共にナシ

○『国書総目録』

国会、東大（四〇―二八八）、京大農（枝番五）、筑波、天理（旧高木）

明治期・藤屋伝右衛門版など

⑤藤屋伝右衛門版（明治印） 序跋同前・龍橋朽

木昌綱序同前、見返（温故堂）、萩廼屋藏板／藤屋伝右衛門〔等〕、のちには萩廼屋藏板／内藤伝右

衛門・同支店 *ただし題字・識語は共にナシ

○『国書総目録』

内閣（二六七―七四）、東大史料、学習院、日大武笠、尊経閣（温故堂の袋付）

⑥青藜閣後刷版（明治印） 序跋同前・龍橋朽木昌

綱序同前、見返（青藜閣）、奥附ナシ *ただし

題字・識語は共にナシ、無許可出版の可能性がある。○『国書総目録』に該当なし。立命館西園寺、山梨

県博甲州文庫（四八〇―一五）などに実例。

二、加賀文庫本『甲斐名勝志』

加賀文庫本は村田屋孝太郎版のうち永栄堂版（天保十五年印）に属する。この版を所蔵する機関は多いのに、ここで加賀本をことさらに取り上げる理由はどこにあるのか。一つは『甲斐名勝志』の諸版を弁別する際、この書は板本の構成要素をもっとも完全に備えているので、あたかも地層の鑑別における示準化石のように識別の標準になるからである。もう一点は、名家の関防印や蔵書印の押捺があり旧蔵者が判明する上、彼らの修得書目に

よって入手先やその年月、購入価格等までも推定が可能だからである。この書は蔵書の伝来がかなり明らかになる点で貴重であり、そこでまず加賀文庫の蔵書を誰がどのように形成してきたのかについて触れ、ついで他の本にはないこの書固有の書誌学的特色を見ていきたい。

(一) 加賀豊三郎と加賀文庫

都立図書館の加賀文庫はよく加賀の国についての文庫と勘違いされるが、事実は大阪生まれの実業家で、愛書家でもあつた翠溪加賀豊三郎（一八七二—一九四四）の旧蔵書である。加賀家は江戸後期からの両替商、明治となつて多くが没落する中で金融商を手堅く続け、彼はそこで仲買業の実務経験を積んだ。明治三十年本人名義で加賀商店（株式仲買業）大阪北店を開業して独立、たちまち頭角を現した。横山源之助は「株式仲間総まくり」の中で、大阪方の代表となつて、昨今隆々たる威勢であるのは大一「家号」の加賀豊三郎とした。「彼は大阪の株式市場で雷名高かつた加賀定の三男、兄弟四人打ち揃ふて市場に打つて出たのは武者振勇ましく、大阪の加賀銀行

は同人父子の経営に拘はるものであつた。老父の物故するや、任意銀行を解散し、東上したのは日露戦役当時であつた。東京取引所の仲買人となつたのは三十八年の八月であつた。大一の加賀は東上すずに老父の傍らに在つて斯界の消息に熟してゐたのである。其の後忽ちにして頭角を現はし、東西連絡を通じて、大阪筋の中心となつたのは流石である。東西の対戦は今後如何なる終局を以て大団円となるか、所謂連戦連勝となるか、或は名譽の退却となるか、余輩は加賀豊三郎の将来に至大の注意を払はんとする者である。」（『横山源之助全集』第五巻

法政大学出版局 二〇〇四年、四二二頁）

実業家としての独立は、洗雲亭と号した趣味人加賀豊三郎の出発でもあつた。自由になる潤沢な資金をもとに古書の蒐集を始め、尾崎紅葉、市島春城、三村竹清、木村仙秀などの文人や愛書家との交流を通じて蔵書を充実していき、昭和十九年没するまでの収集総数は二万数千冊に及んだ。折から東京の空襲は次第に激しさを加え、文献を焼亡から守るため都防衛局の事業として貴重古書を買ひ上げ、疎開して保存する計画が具体化した。多くの蔵書家に交渉して割譲を求め、その評価委員には弘文

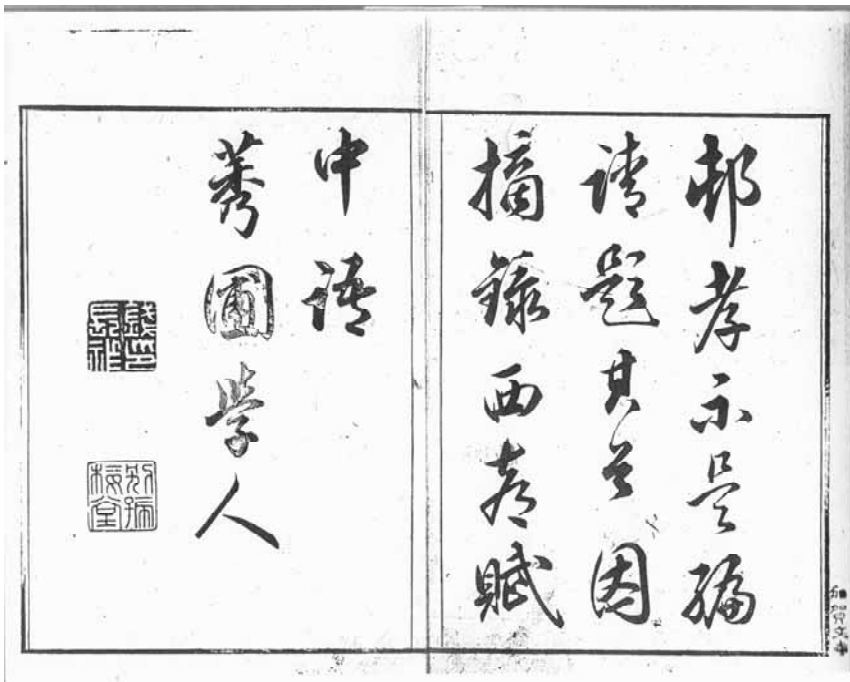


図7. 浅野梅堂題字の後語（加賀）

莊反町茂雄が任命された。これを「戦時特別買上図書」と呼ぶが、その実現の第一が加賀豊三郎の旧蔵書であった。江戸文学を中心とした貴重資料、中でも洒落本、黄表紙などの江戸戯作は質量ともに優れ、これらを戦火から守った当時の日比谷図書館員の功績は特筆大書さるべきであろう。

(二) 浅野梅堂の題字

前表紙をめくると目に入るのが題字である。見返の対面即ち最も目立つ巻首に題字が置かれている。陰刻の関防印「漱芳閣」に続けて半丁づつ「観・跡・聞・老」の揮毫、さらに梅堂の後語「村孝示是編／請題其首因／摘録西都賦／中語／莠圃学人 浅長祚印〔陰刻方印〕 別号梅堂〔方印〕」（図7）がある。後語によると、この地誌の首にある梅堂の題字は村孝（村田屋孝太郎）の求めに応じたもので、「西都賦」中の語から四文字を抜いて作ったとしている。「西都賦」は班固（孟堅）の作で、漢の高祖（劉邦）が開いた長安の都の世々代々の繁栄をうたった辞賦。『文選』賦篇に所収、その賦の結句前行に「若臣者、

徒觀迹於旧墟、聞之乎故老」（私のごときはただ旧跡を遊覧し、これを古老に聞いただけのこと）^①とある。この四字熟語は人口に膾炙していたようで、例えば仙台の佐久間義和（洞巖）著『奥羽觀迹聞老志』は奥州地方の地誌であるが、その序文にも「於是用旧書題号曰之觀迹聞老蓋取之班孟堅之西都賦也」とあって、タイトルの由来を明かしている。

浅野梅堂は本身（三千五百石）の旗本で幕府内での経歴も輝かしく、幕末の動乱期には浦賀奉行、京都町奉行、江戸町奉行などを歴任した。中でも注目されるのは天保十三年（弘化二年）に甲府勤番支配を勤めたことである。まさに『甲斐名勝志』の復刊時期に重なる。甲府勤番とは享保九年三月からの甲斐国の新制度で、幕府直轄地の支配組織のこと。老中の直接指揮下におかれて甲府城に常勤し、甲斐国全般を武力で守り、合わせて甲府城下町の市政をも担当した。勤番は複数制で、そのトップに大手、山手と呼ばれる二人の勤番支配がいて月番で城代を勤めた（上野晴朗『甲州風土記』二四七〜二五一頁）。

梅堂は若いころから書画を好み、その識見と豊かな財力を以て「書画ノ料ニ充ツ故ニ蓄蔵モ少カラズ漱芳閣書

画記六卷アルニ至ル」（『寒檠瑣綴』巻六）と自慢している。この書画記は《彼の漱芳閣に所蔵する書画典籍器玩について題跋印章版式規画を誌し、更に自らの意見を加えた書鑑》（壺井義正）^②であるが、中でもとくに宋元版の部は名高い。蒐集について言えば、梅堂は江戸の書画商・鑑定家として活躍した安西雲煙の上得意の一人であつたようだ（佐藤温「幕末期文人の書画鑑定と書画市場―『書画展観略記』を中心に」『書物・出版と社会変容』第八号 二〇一〇年四月）。

題字の筆跡からもわかるようにこの文人旗本は書もよくし、甲府在任中に誌した「重新徽典館碑」（撰文は梅堂の文学の師・友野霞舟）はよく知られる。この碑文は梅堂が徽典館の大幅改革に力を尽くしたことも顕彰している。寛政年間中に勤番所子弟の教育のため甲府学問所が勤番役宅内に設置された。ほどなく独立の学舎とその番人が雇われ、そこに徽典館の扁額が掲げられた。それから四十年後、天保十四年正月徽典館は江戸昌平坂学問所の支校になり、学頭が江戸から派遣されることになった。

この大幅改組により学舎の移転、蔵書の拡充整備等が実施され、また教育の対象が庶民にまで拡大されるように

なった。

西尾市岩瀬文庫には『徽典館御書籍目録』なる美濃判の写本がある。末尾近くに猷納本の部があつて、江戸の和泉屋金右衛門などと並んで村田屋孝太郎は『甲斐名勝志』三巻『甲斐叢記』五巻を献上している。

(三) 加賀文庫本『甲斐名勝志』の伝来

① 関防印と蔵書印の由来

加賀文庫本の題字(図2左)には一見すると関防印が二顆あるように映る。カラー図版なら容易に分ることだが、実は下の方は版摺ではなくて漱芳閣の朱印を押捺したものである。ことによると浅野梅堂が自ら押印したのかも知れない。或いは朱印実捺のケースは中野三敏によれば次のように、特製本か配り本の初印本と見てよい由である。それゆえ村田屋孝太郎が梅堂に献上した特製本とも考えられる。何れにせよ加賀文庫本には漱芳閣の鈴印のあることから、梅堂旧蔵書の可能性が高いと見てよいようである。

「序・跋文には、自筆刻の場合、丁寧な場合は首に関防印があり、署名下には姓氏堂号の印が設けられる。また序跋の関防印や姓氏堂号印は、おおむね板刻して墨刷りにするものが通例で、朱印を実捺するものは極めて少なく、もしそのような例があれば、十中八九は特製本か配り本の初印本と見てよい。」(中野三敏『江戸の板本』二四八―二五〇頁)

題字の上欄外の小さな丸い朱印にも注目したい。三味線の糸巻を摸した中を四つに仕切り「中川氏蔵」とある。書物蒐集家と古書籍商を兼ねた中川德基の蔵書印である。彼は書名イロハ順の蔵書目録(複製・『中川德基蔵書目録』ゆまに書房 二〇〇二年)を編製しており、これには購入年月や仕入先、その値段などを記載している。試みに『甲斐名勝志』を検索して見ると、「明治」二五年二月二日/十五銭 三久 三「冊」と出ている。三久は古本屋の三河屋久兵衛のこと、中川はこの店とかなり多くの取引をしていた。

もう一つ幸運な偶然がある。鈴木俊幸の所謂「仕入印や符牒(商売上のメモ)」がたまたま奥附の裏に押捺・記載されていた。楕円形の黒印「三久」と、「七百四十三」

サモノタレ」に読める符牒である。仕入印から三河屋久兵衛の扱い品とわかるから、中川德基の目録記述は裏付を得たことになる。但し符牒の解読は博雅の教示を俟ちたい。

② 『洗雲亭取得書目』

『甲斐名勝志』は加賀豊三郎がいつどのように入手したのかも知りたいものである。これも案外と簡単に判明する。彼はまめな人で古書修得に関する自筆の記録を克明につけていた。既に都立図書館の吉田昭子に紹介^③があるが、『洗雲亭取得書目』三冊（複製：『反町茂雄収集古書蒐集品展覧会・貴重蔵書目録集成』第六巻 ゆまに書房 二〇〇一年）は、何故か千代田区立千代田図書館の特殊文庫「反町茂雄収集古書販売目録」中に所蔵される。この書目は明治四十四年十月から昭和十八年十一月に至る収録期間を三期（第一冊明治四十四年～大正六年、第二冊大正八年～昭和三年、第三冊昭和三年～十八年）に分け、記載の内要は取得の日付、書名、冊数、値段、取得先で、洗雲亭の特製罫紙に毛筆で丹念に記入されている。

『甲斐名勝志』は『洗雲亭取得書目』第二冊の大正八年八月の箇所（図8）にある。諸国の地誌を中心とする一括の出物があつたと覚しく、まとめ買いをした中の一点で購入価格は一円である。加賀豊三郎には他に和紙に活版刷りした『洗雲亭蔵書目』（複製：前掲目録集成 第五巻）がある。これは彼が自身の蔵書の中から自慢の資料を選んでジャンルごとにまとめた一枚刷の書目で、大正三年十一月から年に数回程度のペースで作成を始め、書物愛好家や知友に配布した。この書目には『甲斐名勝志』は載っていない。

江戸藩事情	工芸鏡	武芸名勝志	理目	甲斐名勝志	屋傳	妙々寺志	美やいり
冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊
7	7	7	7	7	7	7	7

図8. 『洗雲亭取得書目』第二冊

三、甲府書肆村田屋孝太郎

(一) 村田屋孝太郎と二つの堂号

——永栄堂から擁萬堂へ

先に述べたように甲府書肆村田屋孝太郎には、何故か永栄堂版と擁萬堂版とがある。単純に考えると村孝は堂号を変更したことになる。奥附は両版とも同一なのに、見返は永栄堂版の製本所名を削り埋木して擁萬堂に替えているから、後者が後印であることは明白である。また版本の諸要素も大幅に異なることは先述の通りである。鈴木俊幸によれば近世出版史において堂号の変更はないわけではない由であるが、ここでの問題は村田屋孝太郎が何故堂号を変更したのか、またそれは何時頃のことなのかということである。

この謎を解くカギはことによると大森快庵『甲斐叢記』（擁萬堂／村田屋孝太郎 嘉永四年刊）の出版にあるかも知れない。この書は別書名『甲斐名所図会』の名の通り、挿絵の多数入った五巻五冊の大本である。上質の美

濃紙、江戸の名工木村嘉平の見事な彫刻など、この書物には金に糸目をつけない豪華本の趣があつて、甲州の田舎書肆の手になる出版物とは考えにくいのである。いささか大胆な推測をすれば、『甲斐叢記』は大森快庵追善のために大森家の入費で製作されたもので、村孝はその出版実務と販売を請負つたのではないかと思われる。

著者大森快庵は甲斐巨摩郡田島の人、初め農を業としたが農業が天下に不可欠の生業なのに何故か農民は蔑視される。それは畢竟無学に帰するとして慨然歛を捨て、江戸に出て朝川善庵の門に学び三四年の間に経史詩文また国学剣法までも習得し帰郷した。その後故あつて駿河の岩淵（富士川舟運の終点）に行き魚塩の要津で商売を始め、商才を発揮して数年のうちに陶朱の富を得た。晩年は郷里に帰住して子弟を集めて教育に専心、傍ら詩作や甲斐叢記の著述にいそしむ。惜しいことに快庵はその地誌を一書に纏めることなく草稿のままにして嘉永二年十一月に没した。それを惜しんだ快庵の弟大森頼周は、快庵の旧友松井渙斎に刪補撰定を、姻戚の秋山復には輯録校訂を依頼（同書凡例）し、追善出版にこぎつけたものが『甲斐叢記』前輯全五巻である。残りの五巻は後輯

として刊行の予定⁽⁴⁾であったが、実現したのは明治二十六年のことであった。

恐らく村孝はこの機会をとらえて甲州地誌の類書として『甲斐名勝志』を増刷し、抱き合わせて販売をもくろんだのではなからうか。それが擁萬堂版という訳である。見返の製本所名を埋木して擁萬堂に改めた、ただではなく、浅野梅堂の題字や追加跋文一丁を除いて永栄堂版の痕跡を消し去り、あたかも新刊のように見せかけて売り出したという寸法である。書肆のこの詐術にはまり、天明三跋刊、天明六序刊と誤った所蔵機関は少なくない。

(二) 徽典館御用書肆・村田屋孝太郎

例によって甲府書肆村田屋にも纏った記事はないように、地道に断片資料をつないで組立てるよりほかはない。早い時期の言及としては、近世地方版研究を提唱された中村幸彦⁽⁵⁾が甲府勤番の武鑑である『甲官便覧』(弘化二乙巳年改 甲府魚町四丁目村田屋孝太郎板) について触れ、村田屋は『甲斐名勝志』や『甲斐叢記』の出版に關係した甲斐では一流の書肆であったとされた。また鈴木

俊幸が編集した『本屋名寄く明治二十年』(一九九九年)⁽⁶⁾を見ると、村田屋は『諸国道中旅鏡』(弘化二年、和泉屋半兵衛版)、『女庭訓宝文庫』(嘉永三年、和泉屋市兵衛版)をはじめ多くの書籍に売弘書肆として掲載されており、書籍の流通を担った甲州の有力書肆とわかる。ちなみに、この『本屋名寄』は維新後に著増する書籍巻末の売弘書肆一覽記事を活用して書籍流通に関与した業者を全国規模で網羅した画期的なツールであり、維新前から営業を始めていた書商の見当もつけることができている。便利である。

寛政年間に甲府勤番に学問所(徽典館)が設置されるから、当然のことながら教育と学習に必要な書籍の需要が増大する。いきおいそれを商売にする者が地元から出てきても不思議はない。創業の年などはハッキリしないが、恐らく村田屋もそうした一人で次第に頭角を現して、徽典館の御用を勤めるようになったのであろう。天保十五年『甲斐名勝志』を復刊する際には、勤番支配の題字で巻首を飾れたのもそのお陰である。管見では最も古い村田屋の出版物は『懷宝甲斐国絵図』(天保十三年寅十月 擁萬堂主人識/甲府書林 魚町四丁目村田屋孝太郎発兌)である。この多色刷の美しい絵図に識語を書いた擁萬堂

主人はたぶん村田屋孝太郎とは別人であろう。当時村田屋は永栄堂主人を名乗っていた筈だからである。ところがこの絵図の元版は「天保十三年寅十月有昌堂主人識／＼二文字屋藤右衛門蔵版」⁷⁾であって、村田屋版は求版して識語と版元部分を改削し自らの名前に替えたものと判明した。従って刊年も天保ではなく嘉永年間の印刷かも知れず、擁萬堂主人はやはり村田屋孝太郎となる。『四書字引捷徑』（嘉永元年）も求版本で、村田屋にはまだ独自に出版するだけの力が備わっていなかったようだ。

弘化年間には甲府勤番の武鑑である『甲官便覧』を何度か改訂して出しているが、まさにこれは御用書肆村田屋の特権と云うべきであろう。この時期の活動は『林鶴梁日記』（日本評論社 二〇〇二年）からも覗えるので、関係記事を摘録して見よう。林伊太郎（鶴梁 一八〇六～一八七八）は三河遠江で名代官と言われた評判の良吏、弘化三年三月から一年間江戸から派遣されて徳典館の館頭を勤めた。著書に『鶴梁文鈔』十巻・続編二巻があり、夏目漱石が愛読したことで知られる。

▲弘化三年五月七日 甲府魚町四丁目村田屋孝太郎、三十年程継母江能事へ候事、実父母江も能事候処、当時

皆死ス

▲同年七月十三日 村田屋孝太郎代常吉来二付、六部代金二両二分二朱二百十六文遣ス／＼四〇匁五分 八家読本、十三匁 山陽詩鈔、四十三匁 林注左伝、十匁 方正学文粹、十六匁 左伝鑿、三十七匁 詩経筆記

▲同年十二月二十九日 坤輿図識并新製輿地図と甲官便覧二冊と之代式分ト百八十文、村田屋孝太郎二払遣ス
嘉永年間になると村田屋は堂号を永栄堂から擁萬堂に替えたようだ。理由はよく解らないが、大森家と縁辺につながるようなことが起こったのかも知れない。

『懷宝甲府絵図』（嘉永二年己酉七月上梓 甲府魚町四丁目／擁萬堂村田屋孝太郎誌）は多色刷の名所遊覧に便利な携帯用地図であるが、擁萬堂と名乗った刊記に注目したい。なお、この絵図の出版については「甲府表郭内略絵図出版売出し度彼地町人共願出取扱方問合調」（『市中取締類集二一書物錦絵之部四』東大出版会 一九九四年、第二七九件）と云う面白い史料があるので紹介しておこう。

「甲府表魚町孝太郎と申もの、彼地郭内外略絵図別紙之通り致出版売出し度旨願出申候」

絵図の出版では三都などでよく類版騒ぎが起ころるので、甲府勤番頭の一存で承諾を与えても構わないか、念のため「右絵図案一枚差越申候間、御問合申候、以上／酉三月二十四日 松平下野守」

この照会に対して、南北江戸町奉行は次のように回答（付箋「酉四月三日、為持遣入」）。

「御書面甲府郭内外略絵図一覽致し候処、禁忌ニ涉候儀も不相見候間、御手限に而御聞届有之、可然哉ニ存候、依之絵図面返却、此段及御挨拶候／遠山左衛門尉／牧野駿河守」

甲府勤番頭の懸念は杞憂に終わったようで、江戸町奉行の判断も単純明快。禁令に触れるところも見当たらないので、勤番頭の一存で許可を与えて差支えないと回答した。なお遠山左衛門尉とは映画や演芸のヒーロー桜吹雪の入墨でお馴染み《遠山の金さん》であるが、この時は南町奉行を勤めていた。

(三) 平山省齋・陳平父子と

擁萬堂村田屋のその後

① 平山省齋と二人の従者

慶応三年九月外国奉行平山省齋（敬忠、図9）は、長崎で発生した英艦イカラス号水兵斬殺事件（顛末は司馬遼太郎『慶応長崎事件』が要を得ている）応接のため先ず土佐に赴いた。下山人の容疑が土佐藩海援隊士にかけられたからである。この出張には『暴夜物語』訳者永峰



図9. 『現今英名百首』（宝文閣 明治十三年二月）（架蔵）

秀樹など二人の甲州人が従者として随行したが、その時の話。

「名だけは軍艦の回天丸に兵庫のお台場脇から一同乗船し、沖へ乗出すと風雨が暴れ始め、乗組みのお供が、甲府の本屋の隠居功力孝平と、侍分は夫の外に二人あつたようですが、外輪船で船内油臭く、吐気を催さないものはなく、ヤット土佐の須崎へ着きますと、英国の軍艦が一艘儼然と碇泊していましたが、コレは土佐の侍分が大坂で英人を斬つたので直談判だという話。」（『旧幕書生の明治出世物語』『幕末明治女百話』岩波文庫、一七六頁）

これを英国外交官アーネスト・サトウから見ると、「九月三日の早朝、われわれの艦は土佐の須崎という小さな港の外に投錨した。港内には、大君の軍艦イーグル号（回天丸）と、それよりも小型な土佐藩主の軍艦一隻とが碇泊していた。」（『外交官の見た明治維新』下巻 岩波文庫、五八頁）となる。また談判の相手方平山省齋には慶喜謁見の際に会っているが、「平山は最近昇進した人で、狡猾そうな鋭い顔つき、小柄な老人で、素姓はどちらかと言えば低い方だった。私たちはこの老人に狐という

あだ名を呈していたが、それは平山にはうつつけの名であつた。」（同書、三八頁）となかなか手厳しい。

幕末の兵馬紛乱の折にはよく草莽の崛起がみられたが、甲府の本屋の隠居功力孝平と永峰秀樹とは甲州のささやかな一例と言えようか。従者となつた二人と平山省齋の結びつきは微典館にあつたようだ。安政六年末平山は將軍継嗣問題で一橋派とみられ、書物奉行から甲府勤番に左遷された。文久二年に召返されるまでの間甲府に在つて、微典館で漢学教授などをしていたらしく永峰秀樹は受講した一人であつた。御用書肆村田屋の隠居功力孝平も微典館に出入りするうちに平山と顔見知りになつたのであろう。

永峰秀樹は本姓小野氏、北巨摩郡浅尾新田の人代々医者の家で、とくに父小野通仙は蘭方医として高名である。英国水兵斬殺事件の談判はその後長崎に移り、ここでの滞在中に英語を覚えたことが後に海軍兵学校で教鞭をとる契機となつた。明治初期の翻訳家として多方面の翻訳を手がけたが、その抱負は広い世界の事を知らしめて日本人の島國的自尊心をくじくにあつたという。（『永峰秀樹伝』柳田泉『明治初期の翻訳文学』、二九七頁）

② 村田屋の衰退と藤屋内藤伝右衛門の興隆

幕府が瓦解して新時代を迎えると後ろ盾を失った村田屋は経営が苦しくなった。また隠居の政治狂いで商売が御留守になったのも響いたかも知れない。先に述べた甲斐国の地誌や絵地図の蔵版は次々と手放す羽目になった。その受け皿となったのが新興の藤屋内藤伝右衛門（藤伝）で、甲府書籍商の主役はこうして入れ替わった。藤伝が県下第一等の書店となるに就いては面白い挿話がある。戊辰兵乱の折義母の内藤満春子は、放出された勤番屋敷の古書物、ただではなく遠く信州の各藩までも手を延して大量に買い込んだ。平時になるとそれらは何十倍にも値上がりしたので、忽ちの中に身代は拾ったように出来てしまった由である。その資本を基に藤村紫朗県令下の県庁に食い込み官需を独占する。活版印刷機を導入して県布達類の印刷配布を請負う一方、『甲府新聞』などを発行、これは自店の広告媒体でもある。明治五年近代学校教育が始まると小学校の課業書は必須のものになり、出版者にとっては従来にない新市場の出現で一大商機となった。藤伝は当初文部省蔵版翻刻教

科書や、県学務課および県師範学校編輯の教科書類を製本発売したが、やがて独自に各教科の課業書や参考書を編輯発売して好評を博し、教科書出版はドル箱になった。

隠逸道人「探梅余香」は『山梨民報』紙上に連載の人物評判記であるが、それに初めて登場した女性が藤伝の義母内藤万春（『探梅余香』内藤満春子（一）～（七））『山梨民報』明治三十三年二月二十四日～三月四日）である。その第一回の記事では、県下一の大書林を開き一時は東京塩町に支店を設けて東京の大書店と競うほどの出版活動を展開したのは、表面上は内藤伝右衛門であるが其実この万春の方寸から出たもの、それゆえ当代の女傑と云うべきだとしている（同前（一）二月二十四日）。この女傑はまた異種百人一首という幼童婦女向けの際物出版に載る（図10）ほどの人気者で、その肖像と詠歌「起て思ひふしてはわぶる世の中に などもすら男とうまれざりけむ」からも、男勝りの人物と納得できよう。

③ 静岡での再起——功力孝と擁萬堂大森弘三郎

「◎村田屋も井筒屋も只旧来の書店で商法を手固く営



図10.『貞操節義/明治烈婦伝』(文永堂
明治十六年十一月)(国会図書館蔵)

むと云ふ計りで到底突飛的に大手を抜けて官庁の仕事を一手に受負ふて遣て見るなど、云ふ商家家ではないから話にならぬのを内藤は流石に女傑たる満寿子が内助ある所へ又伝右衛門と云ふ男も随分太腹の方だから進んで手を出した山が旨く当つて忽ちの内に財産を造り出したと云ふものだ夫に反してトウトウ他の二店は閉店するに至つたのは是非もない事だが此処が先見の立と立ぬの境であるから抛ない訳だろう。」(同前(四)二月二十八日)

この記事は三十年前の本屋事情を回顧したものであるから、必ずしも正確な記憶とは限らない。『甲府買物独案内』(明

治五年)の明治七年修訂版(国立国会図書館蔵⁸⁾)を見て、村田屋も井筒屋もまだ健在のようである。しかし早晩藤伝に圧倒されて甲府の地では商売が難しくなる。ところが人の運命は不思議なもので村田屋はかつて培った人脈を生かして富士川につながる静岡の地に活路を求め、維新後旧幕臣の多くは静岡へ移封されるが、そこでは早速子弟教育のため静岡学問所や沼津兵学校が創設された。詳しいことは樋口雄彦の名著『沼津兵学校の研究』(吉川弘文館 二〇〇七年)に就かれるとよいが、村田屋は端無くも平山省斎・陳平父子をはじめ旧知の人々に再会又は消息を得て、彼らの協力を取り付けて本屋稼業を続けるのである。

「七間町三丁目に和漢書物老舗功力孝(図11)といふ本屋があった。この人は山梨県人で、静岡へ来て出版業をした。静岡の文化に貢献したこと尠くない業績を残している。平山陳平と知りあひで、陳平の著書、平山の兄磯部物外の著書を出版した。平山は山梨県に居つたことがあつて其頃功力の恩顧を受けたことがあつたそうなる。

功力の弟の大森弘三郎は呉服町三丁目の書店擁萬堂を経営してゐた。功力と共同で出版をした。平山の著書で一

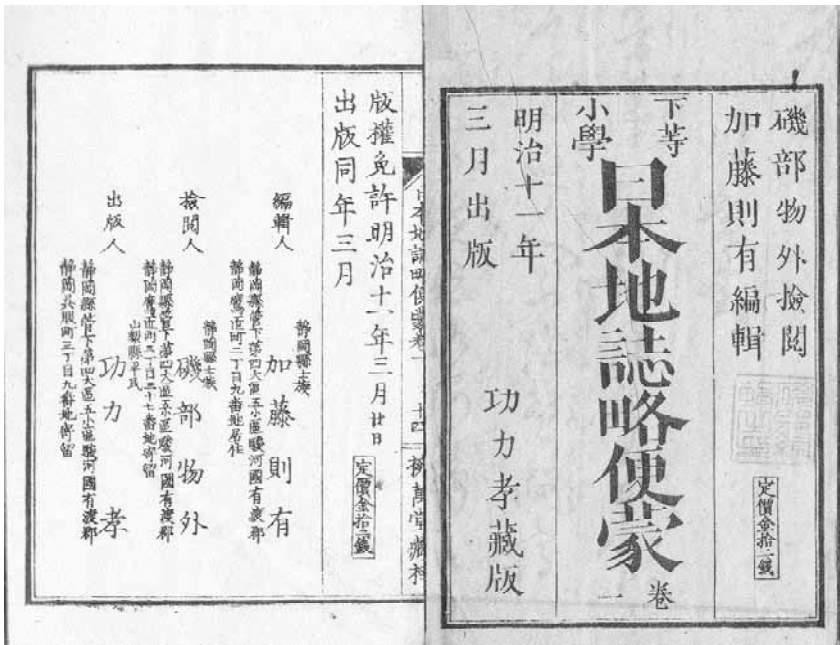


図11. 『下等小学/日本地誌略便蒙』（功力孝藏版）の見返と奥附（架蔵）

番売れたのが三史字類、これは国史略、日本外史、皇朝史略かの難解の文字に註釈を施した字書で、当時どの小学校でも盛に読まれたので、よく売られたのである。（中略）平山の静岡県地誌は小学用で、これもよく売れた。磯部物外の著書に日本全国の地理書があつてこれも各地の小学校で用ゐられたから、発行部数は多かつた。（小山枯柴『維新前後の静岡』 安川書店 一九四一年、一四〇～一四一頁）

村田屋の本姓は功力氏だから、功力孝は隠居の倅又は養子にあたる人物かも知れない。擁萬堂を堂号としているから、少なくとも村田屋の一党であることは確かであろう。文中の小学用書は正確に言くと、平山陳平『改正静岡県誌』（明治一二年四月）、磯部物外『下等小学日本地誌略』二卷（明治一〇年一二月、静岡師範学校蔵版）で、何れも近代デジタルライブラリーで閲覧可能である。

④ 『三史字類』編輯の人々

国史略、日本外史、皇朝史略の三史は漢文初学者がまず教わる日本歴史の入門書、『三史字類』（明治九年

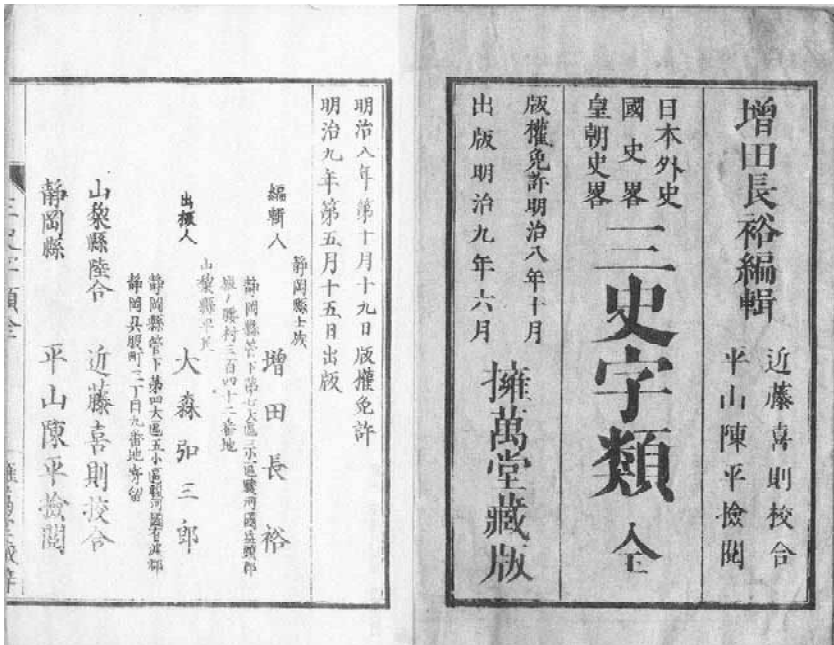


図12. 『三史字類』(大森弘三郎刊)の見返と奥附(架蔵)

五月 大森弘三郎刊 図12) はそれらの難解の字句を字画順に並べ註釈を施した字書で、学習に便利であり生徒に重宝されたものと思われる。現物を見ると平山陳平は著者ではなく監修の役、実質的な著者は編輯人増田長裕である。この人物は履歴が掴めないでいたが、同人社中村正直の高弟らしく加賀美平八郎経営の私塾成器舎に教師として派遣された経歴(保坂忠信『英語世界の中で』開隆堂 一九八一年、二三頁)があるようだ。甲州八代郡八代村の成器舎は同人社の出身者を多く迎えていた。

校合に当たったのが山梨県睦合の近藤喜則とは驚きである。彼は睦合村南部の本陣の家に生まれ、村方の指導者として活躍する。この地は駿州往還の駿河国境の宿場町、富士川舟運の中間船着場でもあつて経済的に繁栄していた。明治三年初め聴水堂と称した私塾を拡張して自邸内に蒙軒学舎⁹⁾を設け、郷党の子弟を集め教育した。初期の教師陣の中には平山省齋がいた。明治八年洋学塾に転身して学舎を拡充、地元民のみならず静岡、神奈川からも多くの塾生を受入れた。塾生の中には後に出世した著名人も少なくないが、もつとも有名なのは北村透谷である。

明治十年夏カナダ・メソジスト教会の宣教師C.S.イー
ジが通訳の平岩愼保を伴い、蒙軒学舎に来て集会を開き
聖書講義や英語を教えたことがあった。イービの甲州行
きを仲介したのは東京大学理科で平岩愼保と同期の大森
俊次である。彼は大森快庵の孫にあたり、郷里を出て沼
津兵学校員外生となり更に東京大学を卒業（理学士）し
て後に農科大学教授となった秀才である。元の姓名は吉
成宮内といい、静岡擁萬堂は親類にあたる由だから奇縁
と言うほかない。沼津擁萬堂は上土町にあり店主は吉成
寿三郎、その主な出版物については凶録『本のぬまず人
物誌』（沼津市明治史料館 一九九八年）のカラー図版が
参考になる。加藤景孝『茶説集成』全二冊（明治七年八
月、平山省齋蔵版）、平山成信『仏蘭西法律問答』全四冊
（明治九年十月、序文は平山省齋）など平山父子の関わ
るものが目につくが、本来は沼津兵学校用教科書など所
謂沼津版の版元である。

このような事実を見てくると、「功力、大森、吉成とい
う三家は一族であったと考えられる」（樋口雄彦 前掲書
四五―四五二頁）と云う見方が、目下のところ最有力の
仮説といえそうだ。

おわりに

以上ながながと、『甲斐名勝志』を対象とした板本書誌
学の技術面、とくにその要諦「刊・印・修」の弁別につ
いて着眼点と勘所を述べてみた。またその中で加賀文庫
本を選んだのは、諸版識別の基準となる板本の構成要素
が十全に備わるだけでなく、この書自体が浅野梅堂の関
防印をはじめ由緒ある痕跡をいくつも有する稀本でもあ
ることによる。奇縁だがこの本を製本発売した人物は外
ならぬ梅堂に題字を請うた甲府書肆村田屋孝太郎であり、
この機会にやる人のいない彼の出版活動を跡付けてみた。
幕末から明治にかけて書物を介して、また幕臣との紐帯
を通して峡中（甲斐国）と海の国静岡とが緊密につなが
っていた事実は新鮮な発見であった。

本稿は人物研究の第一人者森銃三の「甲斐名勝志」（『落
葉籠』五一）¹⁰に負うところが大きい。これはごく短い書
物随筆だが、天明六年龍橋朽木昌綱の序文は洋学者前野
良沢の徳憑に依ることや、題字を書いた人物は姓氏堂号
印「浅長祚印」「別号梅堂」に拠って旗本の浅野梅堂と指

摘された中味の濃いもの。題字や序文の主が誰か分らずにいたところ、碩学のこの短文に出会って一気に氷解した記憶がある。実は森銑三の「甲斐名勝志」は加賀文庫本を経眼して執筆されたもの。題字は永栄堂版にしかないし、また当時先生は古文獻の整理指導で毎週都立図書館特別文庫室に通われていたので、フト目にとまった甲州地誌の序文や題字から一文を思いつき蘊蓄を披露されたのであろう。

【注】

(1) 中島千秋『文選（賦篇）上』（明治書院 一九七七年

〈新釈漢文大系七九〉）五二頁

(2) 壺井義正『漱芳閣書画記―附註影印』（関西大学東西学術研究所 一九七三年）解題。解題中に浅野梅堂は「名品を臨写影摸して刊行することは当時の流行であったが文久三年に漱芳閣藏真六帖を出版した。是は藏品中の逸品二十六種を選んで模刻上梓したもの」とある。これがヒントになったとは思えないが、加賀豊三郎にも良く似た出版物がある。『洗雲亭清賞』帙入一冊・別冊解説（昭和十二年刊）であって、所蔵する名家自筆本の半葉を多色刷木版に付した豪華図録である。「現代の木版印刷文

化の精華を極めて、永く後世に気を吐くに足るの書なり。装丁また善美を尽して、到底書肆などの企て及ぶべからざるもの。」と森銑三は『読書日記』（昭和十三年十一月三十日）に記した。

(3) 吉田昭子「加賀豊三郎研究ノート その二―加賀文庫形成の軌跡」（『日本古書通信』第六八巻一号 二〇〇三年一月）。なお「その一」（『日本古書通信』第六三巻三号 一九九八年三月）では、加賀豊三郎と加賀家の人々について経歴や幅広い趣味などの紹介があり、合わせて参照されるとよいだろう。

(4) 『甲斐叢記』後輯全五巻は活版刷で図版なども一切ない味気ない本である。明治十年四月甲府に来たアーネスト・サトウに藤伝は「『甲斐名勝』全五巻には出版するまでに千円もかかり、売っても割には合うまいから第二部はそのままにしてある」と述べた由。村田屋から求版はしたものの、これを木版で出版するとコスト倒れになるから、第二部（後輯）の出版は目下放置している、と云う訳である。（拙稿「アーネスト・サトウと内藤伝右衛門の交流」『明治の出版文化』臨川書店 二〇〇二年、所収）

(5) 中村幸彦「近世地方出版研究の提唱」（『長沢先生古稀記念図書学論集』三省堂 一九七三年、のち『中村幸彦著

- 述集』第一四巻 中央公論社 一九八三年)
- (6) 鈴木俊幸 『近世日本における書籍・摺物の流通と享受についての研究―書籍流通末端業者の網羅的調査を中心に』(一九九九年三月、科研費調査報告書)
- (7) 高橋修 『近世甲斐国絵図論序説』(『山梨県立博物館研究紀要』第二集 二〇〇八年三月) 七二〜七三頁
- (8) 明治七年修訂版の題簽は「売買／必携 甲府買物独案内」、見返対面の口絵が「山梨県下／勸業場図」に変わる。この口絵は明治七年十月に竣工した勸業製糸場で煙突が林立している。本屋の項目でも藤伝の箇所は埋木して「甲府新聞本局／又新社」「山梨県小学校用本製本所／内藤伝右衛門」と変えている。
- (9) 福岡哲司 『蒙軒学舎とその時代―山梨における明治初年の洋学塾』(『近代山梨の光と影』山日ライブラリー 二〇〇六年)
- (10) 初出は『日本古書通信』二四巻一〇号 一九五九年一月、六頁。なお『落葉籠』は同誌一九五五年八月〜一九六六年八月連載の書物随筆。『森銃三著作集 続編第十一巻』(中央公論社 一九九四年)、『落葉籠』上下(中央公文庫 二〇〇九年)で見られる。